第１講

承和９年、三筆の一人橘逸勢流罪となる　（2021 年度第１問）
－なぜ９世紀後半は皇位継承をめぐる争いが起きなかったのか－

次の⑴～⑸の文章を読んで，下記の設問に答えなさい。

⑴　842 年嵯峨上皇が没すると，仁明天皇を廃して淳和天皇の子である皇太子恒貞親王を奉じようとする謀反が発覚し，恒貞親王は廃され，仁明天皇の長男道康親王（文徳天皇）が皇太子に立てられた。以後皇位は，直系で継承されていく。

⑵　嵯峨・淳和天皇は学者など有能な文人官僚を公卿に取り立てていくが，承和の変の背景には，淳和天皇と恒貞親王に仕える官人の排斥があった。これ以後，文人官僚はその勢力を失っていき，太政官の中枢は嵯峨源氏と藤原北家で占められるようになった。

⑶　文徳天皇は，仁寿年間以降（851～），内裏の中心である紫宸殿に出御して政治をみることがなかったという。官僚機構の整備によって天皇がその場に臨まなくても支障のない体制になったためだと考えられる。藤原氏の勧学院，在原氏や源氏の奨学院など，有力氏族は子弟のための教育施設を設けた。

⑷　858 年清和天皇はわずか９歳で即位した。このとき外祖父で太政大臣の藤原良房が実質的に摂政となったと考えられる。876 年に陽成天皇に譲位する時に，清和天皇は藤原基経を摂政に任じ，良房が自分を補佐したように陽成天皇に仕えよと述べている。

⑸　清和天皇の貞観年間（859～876）には，『貞観格』『貞観式』が撰定されたほか，唐の儀礼書を手本に『儀式』が編纂されてさまざまな儀礼を規定するなど，法典編纂が進められた。

設問

９世紀後半になると，奈良時代以来くり返された皇位継承をめぐるクーデターや争いはみられなくなり，安定した体制になった。その背景にはどのような変化があったか。５行（150 字）以内で述べなさい。

解いてみましょう（第１講）

1　問われている（求められている）ことを確認する。

ア　（ア）　には　（イ）　が

みられなくなった背景を書く。

イ　（ア）　は、　（ウ）　になった背景を書く。

ウ　５行（150 字）以内で書く。

2　資料と教科書（山川出版社『詳説日本史』）の内容とを照らし合わせる。
関係する教科書のページと内容は、

教科書の　63 ページの３行目～７行目

⇩

嵯峨天皇のもとでは，法制の整備も進められた。律令制定後，社会の変化に応じて出された法令を，律令の規定を補足・修正する格と施行細則の式とに分類・編集し，弘仁格式が編纂された。これは，官庁の実態にあわせて政治実務の便をはかったもので，こののち，さらに貞観格式・延喜格式が編纂された。これらをあわせて三代格式という。

教科書の　64 ページの８行目～22 行目

⇩

嵯峨天皇は，唐風を重んじ，平安宮の殿舎に唐風の名称をつけたほか，唐風の儀礼を受け入れて宮廷の儀式を整えた。また，文学・学問に長じた文人貴族を政治に登用して国家の経営に参加させる方針をとった。（略）大学での学問も重んじられ，とくに儒教を学ぶ明経道や，中国の歴史・文学を学ぶ紀伝道（文章道）がさかんになり，貴族は一族子弟の教育のために，寄宿舎に当たる大学別曹を設けた。
注①：大学別曹は大学に付属する寄宿施設的なもので，学生たちは学費の支給を受け，書籍を利用しながら大学で学んだ。和気氏の弘文院，藤原氏の勧学院，在原氏や皇族の奨学院，橘氏の学館院などが知られる。

教科書の　　68 ページの１行目～69 ページの８行目

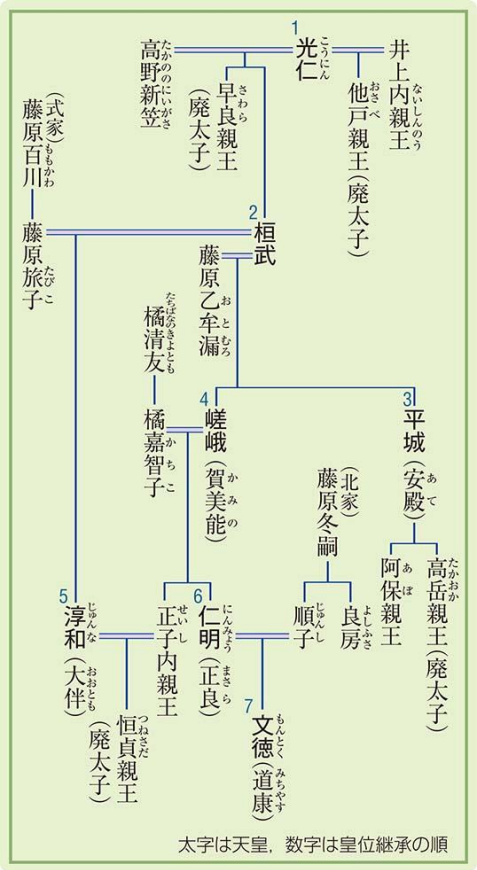
⇩

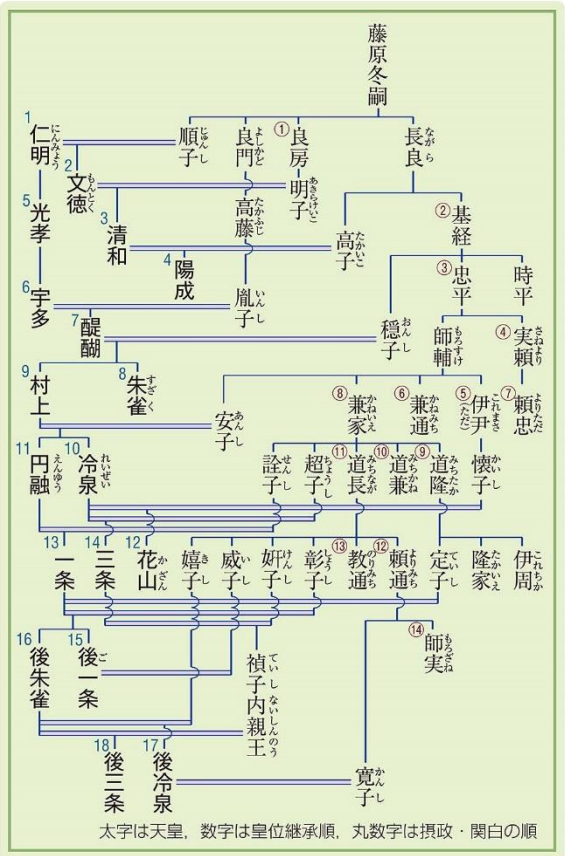
９世紀の半ばまでは，桓武天皇や嵯峨天皇が貴族たちをおさえて強い権力を握り，国政を指導した。しかし，この間に藤原氏とくに北家が天皇家との結びつきを強めて，しだいに勢力をのばした。

北家の藤原冬嗣は嵯峨天皇の厚い信任を得て蔵人頭になり，天皇家と姻戚関係を結んだ。ついでその子の藤原良房は，842（承和９）年の承和の変で藤原氏の中での北家の優位を確立する一方，伴（大伴）健岑・橘逸勢ら他氏族の勢力を退けた。

858（天安２）年に幼少の清和天皇を即位させた良房は，天皇の外祖父として臣下ではじめて摂政になり，866（貞観８）年の応天門の変では，伴・紀両氏を没落させた。良房の地位を継いだ藤原基経は，陽成天皇を譲位させて光孝天皇を即位させ，天皇はこれに報いるために，884（元慶８）年に基経をはじめて関白とした。さらに基経は，宇多天皇が即位に当たって出した勅書に抗議して，888（仁和４）年，これを撤回させ（阿衡の紛議），関白の政治的地位を確立した。こうして藤原氏北家の勢力は，急速に強大になった。

基経の死後，藤原氏を外戚（母方の親戚）としない宇多天皇は摂政・関白をおかず，学者菅原道真を重く用いたが，続く醍醐天皇の時，藤原時平は策謀を用いて道真を政界から追放した。





３　与えられた資料と教科書の記述をもとに作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。

東大チャート「なぜ９世紀後半は皇位継承をめぐる争いが起きなかったのか」（2021 年度第１問）

（ ［　　］ は抜き出して入れる。 ［　　］ へは考えて決めゼリフを入れる。）

【教科書の記述】
９世紀の半ばまでは，桓武天皇や嵯峨天皇が貴族たちをおさえて強い権力を握り，国政を指導した。（P68 L1～2）

⑵　嵯峨・淳和天皇は学者など有能な文人官僚を公卿に取り立てていくが，承和の変の背景には，淳和天皇と恒貞親王に仕える官人の排斥があった。これ以後，文人官僚はその勢力を失っていき，太政官の中枢は嵯峨源氏と藤原北家で占められるようになった。

⑶ 文徳天皇は，仁寿年間以降（851～），内裏の中心である紫宸殿に出御して政治をみることがなかったという。官僚機構の整備によって天皇がその場に臨まなくても支障のない体制になったためだと考えられる。藤原氏の勧学院，在原氏や源氏の奨学院など，有力氏族は子弟のための教育施設を設けた。

⑸　清和天皇の貞観年間（859～876）には，『貞観格』『貞観式』が撰定されたほか，唐の儀礼書を手本に『儀式』が編纂されてさまざまな儀礼を規定するなど，法典編纂が進められた。

⑴　842 年嵯峨上皇が没すると，仁明天皇を廃して淳和天皇の子である皇太子恒貞親王を奉じようとする謀反が発覚し，恒貞親王は廃され，仁明天皇の長男道康親王（文徳天皇）が皇太子に立てられた。以後皇位は，直系で継承されていく。

⑷　858 年清和天皇はわずか９歳で即位した。このとき外祖父で太政大臣の藤原良房が実質的に摂政となったと考えられる。876 年に陽成天皇に譲位する時に，清和天皇は藤原基経を摂政に任じ，良房が自分を補佐したように陽成天皇に仕えよと述べている。

【教科書の記述】
基経の死後，藤原氏を外戚(母方の親戚)としない宇多天皇は摂政・関白をおかず，学者菅原道真を重く用いたが，続く醍醐天皇の時，藤原時平は策謀を用いて道真を政界から追放した。（P68 L6～8）

９世紀の前半は、天皇が ①　　を握り、 ②　　を指導した。

⇩

②　　には ③　　が ④　　。

⑤　　天皇・淳和天皇は有能な文人官僚を公卿に取り立てたので、有力な氏族は ⑥　　のための教育施設を設けた。

⑦　　が進められ、 ⑧　　が整備されると天皇がその場に臨まなくても支障のない体制になった。

⇩

③　　に ⑨　　 ②　　の運営ができるようになった。

恒貞親王を奉じようとする謀反＝承和の変以後、皇位は ⑤　　天皇の ⑩　　されていくようになった。

太政官の中枢は ⑤　　天皇の ⑪　　と天皇の ⑫　　である ⑬　　に占められるようになり、天皇が９歳という ⑭　　であっても ②　　の運営が可能になった。

抜き出したものをまとめる

9 世紀の前半は、天皇が ① を握っており、② には ③ が ④ 。

しかし ⑦ が進み、⑥ のための教育施設が設けられて、⑧ が整備される中で、承和の変以後、皇位は ⑤ 天皇の ⑩ されるようになった。

太政官の中枢も ⑤ 天皇の ⑪ と天皇の ⑫ である ⑬ で占められるようになり、③ に ⑨ 、また天皇が ⑭ であっても（＝天皇の ⑮ に ⑨ ）② の運営が可能になった。

初登場です

4　150 字に要約する。

今回、問題を解くことで学んだこと